

第 1 1 回甲賀市総合計画策定審議会 会議録

- 開催日時** 平成29年1月25日(水) 17:30から19:30まで
- 開催場所** 碧水ホール2階会議室
- 出席委員** 新川会長、赤堀委員、大原委員、岡村委員、兼松委員、川端委員、谷井委員、谷口委員、田中伸委員、田中直委員、林委員、松田委員、丸山委員、藪下委員
- アドバイザー** 滋賀県総合政策部市町振興課 三井課長補佐
- 事務局** 平尾総合政策部長、野尻総合政策次長、中島政策推進課長、出嶋課長補佐、北林係長、清水主査、桑山主事
- 会議次第**
1. 開会
 2. 協議事項
 - (1) 今後のスケジュールについて
 - (2) 第2次甲賀市総合計画(素案)について
 - ア. 基本構想
 - イ. 基本計画
 3. その他
 4. 閉会
- 会議資料**
- 資料1. 策定スケジュール(案)
- 資料2. 第2次甲賀市総合計画 序論、基本構想、部分(素案)
- 資料3. 第2次甲賀市総合計画 基本計画、部分(素案)
- 資料4. 平成29年(2017年)成人式における定住アンケート
- 資料5. 地域とのまちづくり意見交換会
- 資料A. 基本構想策定に係る意見および修正事項等
- 資料B. 基本計画に係る意見および修正事項等
- 資料C. 議会での意見【未定稿:速報版】

会議内容

1. 開会

新川会長：総合計画の審議も大詰めになってきた。基本構想、基本計画の中身も固まりつつある。これからは関係者の皆様と対話をしながら、中身を詰めていく段階に入っていく。本日は、前回の審議を受けての修正案について審議をお願いしたい。

2. 協議事項

(1) 今後のスケジュールについて

新川会長：事務局より説明を求める。

事務局：資料1に基づき説明。

新川会長：基本構想、基本計画について、議会からの意見を踏まえた検討を進めるため、パブリック・コメントの時期を変更してはどうか。議会の意見と審議会の意見を相互にキャッチボールしながら、議論を進めてはどうかとの提案であった。これまで、審議会としてパブリック・コメントを行う方向性で進めてきたが、議会との対話を重視し、2月に予定していたパブリック・コメントは一旦取り止め、議会との議論を進めることとしてよろしいか。

— 委員一同了承 —

(2) 第2次甲賀市総合計画（素案）について

ア. 基本構想

イ. 基本計画

新川会長：事務局より説明を求める。

事務局：資料2と資料A、資料3と資料B、資料Cに基づき説明。

藪下委員：市内には、国史跡が4つあるにも関わらず、垂水斎王頓宮跡の記載がない。この垂水斎王頓宮跡は、京都からお伊勢さんまで五泊六日かけて行った頓宮跡として唯一残っているものである。うまく収まるように工夫して、追記いただきたい。

事務局：松田委員から事前に修正を受けている。基本構想の8ページの「信楽焼は、紫香楽宮を造成する際の瓦が焼かれたのが始まりと伝えられており」について、瓦ではなく、鎌倉中期の生活雑器が始まりであった。修正させていただく。

田中伸委員：資料C「議会での意見」には、かなり具体的な意見が書かれている。例えば、8番の「どこで人口を増やすのか」については「JR草津線の駅周辺」としている。総合的な内容としては、今までの議論を踏まえたものでよいが、具体的な事業を進めるにあたっては、意見を絞り込まなければ、総花的でぼやけた内容になってしまう。それぞれの事業はどのようにまとめるのか。スケジュールの確認をお願いしたい。

事務局：具体的な事業については、来年度の予算構築に合わせて検討している。

次回の審議会では、すべての事業ではないが、実施計画のアウトラインを提示したい。

川端委員：資料Cの8番、基本構想の20ページの都市構造に「ダイバーシティ・ビレッジ」とある。「住民の多様性を活かす」ことが最初に挙げられているが、具体的な対応策のひとつに「JR草津駅の駅周辺における機能集積と人口増加を目指します」と記載されている。私の考えでは、多様性を活かすことと、駅周辺の人口増加を目指して集約することは相反するものである。どのように周辺地域の特色や住民の多様性を活かすのか、具体的に教えていただきたい。

事務局：都市構造における「ダイバーシティ」は、地域ごとの多様な文化・歴史を守り、活かしていくことである。このためには、中山間地域において顔の見える関係性が築かれており、住民同士の支え合いができる、概ね小学校区単位のコミュニティは守りたい。一方で、中山間地域での暮らしに不安を抱える高齢者や若者などは、水口地域および甲南地域などJR草津線沿線に転居を希望されている方も多く、無理に中山間地域に留まらせることはできない。都市部からのUターン者も同様であるが、現状では土地利用規制などもあり、駅周辺で居住できる条件は整っていない。これらの都市計画などの条件整理を行うものである。中山間地域の住民を強制的に草津線沿線に誘導することは考えていない。中山間地域での暮らしや文化も守るために、そこでの買い物、移動、医療などの維持を行なえる仕組みをつくるのが「ダイバーシティ・ビレッジ+ネットワーク」の考え方である。

具体的な事業は、チャレンジプロジェクトにも記載しているとおり、であるが、資料3の7ページの8番「空きキャパシティ活用プロジェクト」では、空き家、空き地、空き店舗、空き農地、空き公共施設などの「あるもの活かし」で活用していき、それぞれのライフスタイルに合わせた住み方を支援していく。9番「中山間地域再生プロジェクト」では、中山間地域における公共交通の利便性を改善するため、コミュニティバスの路線・ダイヤの見直しと、地域によるコミュニティ・ビジネスや鳥獣害対策への支援を充実していくこととしたい。

川端委員：資料Bでの6番の意見としては、その地域の自治振興会が権限をもち、地域内分権による取り組みを進めてもらいたい、ということが伺える。しかし、学校再編計画により、10年以内に小学校を閉校するとすれば、学区単位の自治振興会の範囲はどうになってしまうのか。

事務局：ご指摘のとおり、自治振興会は概ね小学校区単位を基本としている。自治振興会の活動や今後の展開に期待しており、人口減少に立ち向かうためには必要な組織である。住民の判断によるが、小学校が閉校した場合においても、現在の規模は維持されるのではないかと。地域ごとの特性に合わせて住民とともに検討することとなる。

林委員：資料2の21ページについて、「概ね小学校区単位をつなぐ」と記載さ

れている。例えば、山内小学校に通っていない児童が大人になったとき、「山内小学校区」にいることになっては違和感が生じる。別の単位も視野に入れてはどうか。

事務局：小学校区という単位は、例えば閉校になった場合は条例の中で改正されるため、小学校区という言い方が適切かどうかは疑問に思う部分もある。概ね旧村単位でもあるので、別の言い方を検討したい。

大原委員：資料C「議会での意見」の4番について、基本構想の11ページの「誰もが主役」か「主体」かは、すべて「主役」に統一するというのか。

事務局：そのように考えている。

大原委員：個としては「主役」でよいが、市民としては「主体」の方が適切ではないか。「市民としてのまとまりがまちづくりの主役」では違和感がある。また、最近の豪雪による土山町の被害は大きく、水口から土山に帰るのに数時間も要するほどであった。雪害は中山間地域にとっては切実な問題である。これらについての記載を切に願っている。

事務局：個人が「主役」で、団体が「主体」というのは、ご指摘のとおりである。整理させていただく。雪害について、基本構想の25ページの3に「住み慣れた地域での暮らしを守る」、「今世紀前半の発生が危惧される南海トラフ地震や、近年頻発する局地的短時間豪雨への対応を強化します」との記載はあるが、この部分に入れるかどうかについて検討させていただきたい。大雪は年に数回であっても、その被害は大きく、それらを起因として、この地域に住みつづけることは不可能とおっしゃる方も多し。検討させていただく。

丸山委員：基本構想の20ページの「ダイバーシティ・ビレッジ」という言葉は、理念をそのままとし、文言のみを「コンパクト・シティ」から置き換えたものだが、どうもピンと来ない。「多様性」という言葉はとてもよく、それがつながっていくという考えは理解できる。しかし、「ダイバーシティ・ビレッジ」という文言で聞くと、多文化共生のイメージとなってしまう。「多様性のネットワーク」や「結ぶ」等の日本語でもよいのではないか。

田中直委員：「ダイバーシティ」ではインパクトがない。「コンパクト」では、あまりに強制移転のイメージが強過ぎるため、変えるべきという意見はあるが、「コンパクト・ビレッジ」の方がよいのではないか。

藪下委員：実際に中山間地域の人々の意見を聞くと、若い人たちは水口に転居し、古い家は空き家になってきているとのことだった。これらの空き家に、都市部の子育て世帯などが移住すれば、さらに多様性が生まれる。多様性は非常に重要なテーマになってくるのではないか。

谷井委員：信楽高原鐵道の車輛が忍者にラッピングされると聞いたが本当か。

松田委員：平成25年にラッピングしたタヌキの列車2台が忍者となると聞いている。多様性という面では、信楽らしいラッピングは残してもよいのではないか。

大原委員：個人的には「ダイバーシティ」など、多様性という意味あいには非常によいと考えている。人それぞれが違うという「ダイバーシティ」という言葉をどこかに入れておけば、市民も安心できる計画になるのではないかと考えている。

田中直委員：この際、新しい言葉をつくってもよいのではないかと考えている。

新川会長：多様性やダイバーシティの考え方そのものは大きな前提とすべきである。一方で、副題として「ダイバーシティ・ビレッジ+ネットワーク」と記載に対して、これからの地域の姿として適切なのかどうかという意見がある。もう一度どのような文言がよいのか事務局で検討願う。カタカナや英語の表現は避けたほうがよいかもしれない。

川端委員：甲南町の野川学区では、駅までの公共交通機関はコミュニティバスしかなく、平日のみの運行で、朝8時前のバスに乗らなければ、次はお昼の11時しかない。また、帰りも17時頃の寺庄駅発に乗らなければ帰ることすらできない。サラリーマンの利用は不可能であり、中学生や高校生も部活後には乗れない。また、中山間の観光地へのアクセスを考えた路線網、ダイヤとしていただきたい。

事務局：コミュニティバスは地域の大切な移動手段であり、本市は全国でも有数の路線網と本数を誇っている。一方で「空気を乗せている」という指摘もある。このことから、鉄道やバス、デマンドバス、予約型の乗り合いタクシーなどのベストミックスを図っていく必要がある。なお、バスの路線網の見直しについては、公共交通推進室で現在検討中である。予約型タクシーは、事前に予約をすれば1時間に1本タクシーが行くという仕組みを考えたい。観光についても、新たな仕組みを考えたい。

新川会長：ネットワークでつなげなければ暮らしが成り立たず、未来にもつながっていかない。このネットワークをどのように考えるかが重要なポイントである。抽象的なネットワークではなく、より具体的に検討願う。

谷口委員：基本構想の25ページの5番「結婚・出産・育児の希望に応える」に「心豊かな交流のもとでパートナーと出会い」とあるが、結びが「子育て環境の整備を推進します」となっている。しかし、結婚が子育てに直結するとは限らないのではないかと考えている。「学ぶ力、豊かな心、健やかな体」は、最終的には「生きる力」を育むことになるが、順番としては「豊かな心」を最初に持ってくるべきではないかと考えている。最後に、「ハードからソフト、ソフトからハードへ」とあるが、「ハード」と「ソフト」が紛らわしい。「心」や「気持ち」にするほうがわかりやすいのではないかと考えている。

兼松委員：表現が堅苦しいので、もう少しポジティブな言葉を入れてもよいのではないかと考えている。例えば、「子ども・子育て」ならば、「子育てをする喜び」などの表現を加えてはどうか。今のままだと、子育ては大変であるという印象を受けてしまう。そうではなく、生きる喜びであると伝わるとよい。

新川会長：カタカナと漢字だけが並んでおり、その間にワクワク感のある言葉が一切出ていないため、もう少し気持ちのこもった文章にしていきたいという要望である。より素直に、「こんな甲賀にしたい」という気持ち

を表現できるとよい。

林委員：資料2の25ページの4番「地域の“稼ぐ力”を高める」について、「稼ぐ力」との表現はいかがか。

林委員：「外貨」は国際輸出という意味か、それとも甲賀市外との意味か。

事務局：市外からのお金のことである。国際的な「外貨」という意味ではない。

林委員：それならば、「外貨」という表現はふさわしくない。

藪下委員：域際収支の考え方に合わせた文言だと思う。域際収支がマイナスであればプラスにするということが「稼ぐ力」ということでよいか。本市はいくらマイナスなのか。

事務局：本市の域際収支については、市外に516億円が流れている状況にある。大きな買い物は、草津市や大津市などの市外で購入し、サービスについても同様である。できるだけ市内でお金を落としてもらうためには、例えば観光でお金を落とさせていただき、地域内で働く人に稼いでもらう仕組みが重要である。

田中伸委員：「稼ぐ力」を「経済力」や「地域経済の活性化」、「財政力」などの表現に変えてはどうか。

事務局：「稼ぐ力」について、本計画の基礎となる総合戦略を受けたものであり、「稼ぐ力」がキーワードの一つとなっている。そして、25ページの「まちづくりの大綱」も、総合戦略を踏まえた内容であるため、検討はさせていただくが、慎重に扱わせていただきたい。

谷井委員：買い物などで、京都や大阪にお金が行っているとのことだが、それを食い止める手段はあるのか。

事務局：地産地消がひとつの手段だが限界がある。例えば、本市には国道1号線沿いにロードサイド店が多くある。ここでの収益は、一見、地域内にお金も落ちているように見える。しかし、販売しているモノは地域内で産まれたものではなく、地域外から仕入れたものばかりであり、地域の企業にお金も流れていない。ロードサイド店に入ったお金は、最終的に東京に流れている。市内の事業者から仕入れていただいたり、市内で全てを製造するなどの仕組みを行政でつくることは難しいが、そのようなライフスタイルや生き方、あり方を伝えることはできる。域内でお金を回す仕組みをつくることは、経済成長だけにこだわらない、新しい豊かさを未来像とした「いつもの暮らしに“しあわせ”を感じるまち」と合致している。

新川会長：域外の産業やサービスに依存している部分をできるだけ内部化する。例えば、甲賀市内の事業者のサービスをできるだけ分厚くし、そこで消費すれば域内循環が高まるという一般的な理論がある。一方で、市内に事業者がいない、あるいはサービスが提供されていないことの現れでもある。

林委員：総合戦略をみると、「コンパクト・ビレッジ+ネットワーク構想」と記載されているが、今回は「ダイバーシティ・ビレッジ」に変わっている。

「コンパクト・ビレッジ」と「ダイバーシティ・ビレッジ」の定義がわかりにくいのではないかと。もう少しわかりやすい表現にした方がよい。

新川会長：本日の修正案についての審議は以上でよろしいか。

— 委員一同了承 —

新川会長：今回の意見を踏まえて、議会の意見をいただく。議会での意見を基に、もう一度審議会で再検討していただくことになる。

3. その他

新川会長：事務局より説明を求める。

事務局：資料4、資料5に基づき説明。

田中直委員：資料4のアンケート結果みると、「愛着がある」が6%も減少しているのが大きな問題である。人が甲賀市の資産であり、最優先項目としてここを上げていくべきである。

新川会長：このアンケート結果も参考にしながら、今後も意見をいただきたい。他にご意見等あるか。

大原委員：2月に総務常任委員会が出た意見を受けて、2回続けて審議会を行うスケジュールとなっているが、年度末なので1回にしてはどうか。パブリック・コメントを出す前に答申案の確認をしてはどうか。

新川会長：次回の審議会は議会からの意見等を踏まえて、審議を行うことになる。その結果を一旦答申させていただき、それに基づいてパブリック・コメントを行うことになる。答申のための審議会は開催せず、答申案の確認でよいのではないかと提案である。

議会からの意見の数、内容にもよる。事務局で合理的な進め方があれば、その方法で進めていただきたい。

— 特になし —

4. 閉会

事務局：以上で、第11回の審議会を閉会させていただく。本日はありがとうございました。